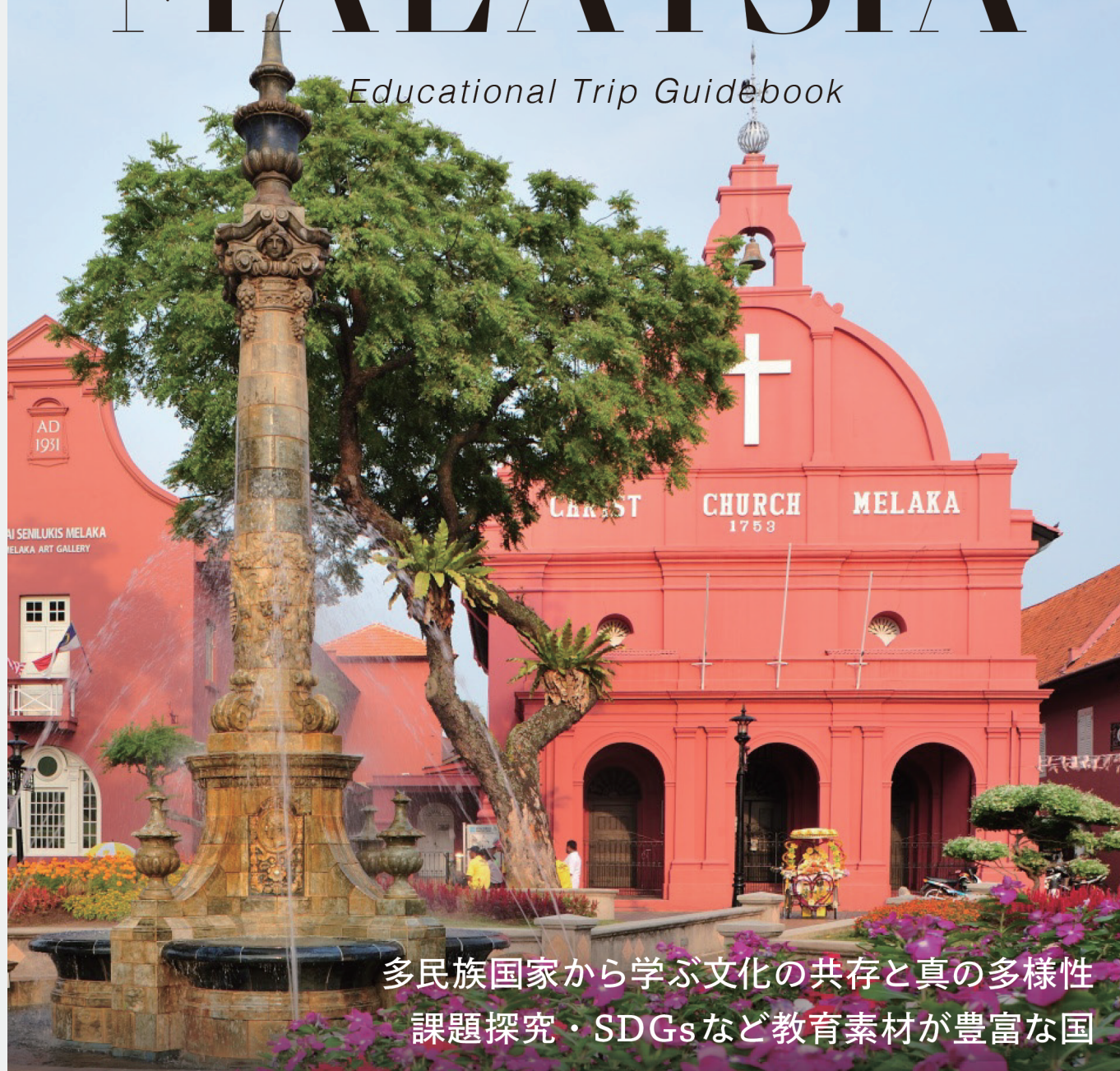




MALAYSIA

Educational Trip Guidebook



多民族国家から学ぶ文化の共存と真の多様性
課題探究・SDGsなど教育素材が豊富な国



マレーシアが 選ばれる 6 つの理由



Reason 1

治安がよく学びの場が多い

めざましい経済発展で、東南アジアの優等生と称されるマレーシア。ペトロナス・ツインタワーに象徴される首都クアラルンプールは、まるで近未来を想起させる大都市です。安定した政治と治安のよさを背景に、多様な民族がそれぞれの異なる価値観や生活様式を尊重し合う平和な社会を築いています。東南アジアで最も治安のよい国のひとつなので、生徒だけでの街歩きなど自主行動も可能。日本では決して味わえない異文化体験ができます。

Reason 2

リーズナブルに快適な滞在ができる

日本からマレーシアへは飛行機で約7時間。JAL、ANA、マレーシア航空など複数の航空会社が就航しており、東京、大阪、北海道など主要都市からは直行便も充実。また、欧米や隣国シンガポールに比べてホテル代が割安で、5つ星ホテルでも比較的リーズナブルな価格で宿泊でき、快適で安心に滞在ができます。ビザなど入国時の面倒な手続きはなく、鉄道やバスなど交通インフラもきちんと整備されています。

Reason 3

英語を目的でなくツールに

国際社会で欠かせない英語。マレーシアは、イギリスが旧宗主国であった歴史から、多くの国民が英語を流暢に話します。とある国際的教育企業の指標(2022年)によると、アジアにおけるマレーシアの英語能力は、シンガポール、フィリピンについて第3位。多民族社会なので、民族間の意思疎通に英語が使われ、文法の正しさよりも“伝わる”ことに重点を置いています。カタコトの英語でも臆することなくコミュニケーションを楽しめ、話す勇気をもらえます。

Reason 4

グローバル人材に必須の国際感覚

マレーシアは、マレー系、中華系、インド系という、主に3つの民族からなる多民族国家です。言語、服装、宗教など文化背景の異なる人々があたり前に側にいて、同じマレーシア人として暮らしています。つまり、国そのものが多様な人々が共生するグローバル社会の縮図であり、マレーシアの文化的多様性を体験することで、様々な価値観を認め合う国際感覚を養い、どんな人ともコミュニケーションがとれるグローバル人材に成長することでしょう。

Reason 5

世界の視点で日本をとらえる

日本とマレーシアの関係は深く、太平洋戦争中の約3年半の間、日本の統治下にありました。1981年、日本及び韓国から経済発展の手法を学ぼうという「ルックイースト政策」が始まり、それから約30年間、毎年多くの留学生が日本に学びに訪れています。2015年には「戦略的パートナーシップについての日本・マレーシア共同声明」を发出。現在両国は、経済・安全保障・国際社会の課題解決を共に取り組む重要なパートナーになっています。

Reason 6

豊富な学習素材がある

カンボンビジット(現地村訪問)では、同じ世代の生徒との学校交流やホームステイで伝統的な生活を体験することができます。また、世界最大級の熱帯雨林や世界遺産キナバル山など、日本とは異なる気候が生み出す多様な自然を擁しており、絶滅が危惧される野生動物や減少する熱帯雨林、森林資源の保護など、世界規模の課題探求型学習に取り組むこともできます。多文化共生や森林研究など多面的にSDGsに関する学習の機会を提供できます。

雄大な自然、移民の歴史、多宗教・多民族・多文化
“真の多様性”と“日本とは違うアジア”を
肌で感じられるマレーシアで

世界に羽ばたく人材の育成 新たな価値観の創造を

クアラルンプール郊外、シャー・アラムにあるマレーシア最大規模のモスク《スルタン・サラフディン・アブドゥル・アジズ・シャーモスク》。通称「ブルモスク」として親しまれている。



1. クアラルンプールの《ペトロナス・ツインタワー》。2. マレーシア特有の生態系が学べる《マレーシア森林研究所（FRIM）》で展示されている昆虫標本。 3. マラッカ海峡の歴史都市として世界文化遺産に認定されているマラッカの街のシンボル《オランダ広場》。4. マレー系、中華系、インド系などの多数の民族で構成される多民族国家マレーシア。



マレーシアで国際感覚と英語力を身につける

国そのものがグローバル社会

マレーシアは、マレー系(約 58%)、中華系(約 23%)、インド系(約 7%)、先住民族(約 12%)からなる多民族国家です。それぞれ民族独自の言語、食習慣、宗教、生活様式を持ちながら、他の民族と共存しています。これはまるで世界の縮図のようで、互いの違いを受け入れる「寛容性」と様々な価値観が共生する「多様性」が、マレーシア社会には根づいています。自分とはまったく異なる価値観や文化に触れることで、国際感覚を養い、どんな文化的背景をもつ人とも臆せずコミュニケーションがとれるグローバル人材への成長を目指します。

英語に加えて複数の言語が飛び交う

国語はマレー語(マレーシア語)ですが、国民の多くが英語を理解し、観光地や教育現場、ビジネスシーンなど、日常で幅広く使われています。そのため生徒自身が、状況に合わせて臨機応変な英語でコミュニケーションを取ることが可能です。また、マレーシア人の多くが、自身のルーツの言語も話せるバイリンガルやトリリンガル。テレビは言語によってチャンネルが違い、町の看板は多言語表示です。共通語として英語を使いながら、話す相手によって言語を使い分けるという、日本では想像ができない言語環境を体験することができます。



1. 《ブトラモスク (ピンクモスク)》行政都市ブトラジャヤにあるフォトジェニックなモスク。 2. 《パツークイブ》カラフルな 272 段の階段が目玉のヒンドゥー寺院。 3. 《テンゴウキウ (天后宮)》マレーシア最大規模の中華系の寺院。

4. 《ナシレマ》マレーシアの国民食。ココナッツミルクで炊いたご飯に、辛いサンバルを混ぜて食べるマレー料理。朝ごはんによく食べられている。 5. 《ロティチャナイ》パイのようなパンに、カレーソースをつけて食べるインド系の料理。薄く伸ばした小麦粉の生地を層にして焼いているため、サクッとした食感はもちろん、モチモチとした食感も楽しめる。



1

1. マラッカのオランダ広場にある《マラッカキリスト教会》。オランダ統治時代の1753年に建てられた教会で現在も信者が訪れる。天井の梁は、それぞれ継ぎ目のない一本の木から作られた、建設当時のままの貴重な姿。2. ポルトガル統治時代の1521年に、マラッカ海峡を一望できる丘の上に建設された《セント

トボール教会》の跡地。重厚な外壁と墓碑が残り、その隣にフランシスコ・ザビエルの像が立っている。3. 《コーンウォリス要塞》ペナンのジョージタウンにある。1786年、イギリス人のキャプテン・フランシス・ライトが初上陸した場所に建てられた要塞で、海を向いた大砲が残っている。



2

歴史、経済の視点で 日本との関わりを考える

歴史から学ぶ

東西貿易の拠点として栄えたマラッカとジョージタウン（ペナン）は、2008年に「マラッカ海峡の古都群」として世界文化遺産に登録されました。繁栄がゆえに、欧州列強からの支配という歴史の波に翻弄されながらも、東洋と西洋をミックスした独自の文化を育み、現在は人気の観光地になっています。また、日本とマレーシアの関係は歴史的に深く、たとえば日本に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、マラッカを拠点に布教活動をしていた際、日本人の弥次郎に出会ったことで日本行きを決意したそうです。



3

経済から学ぶ

マハティール首相（当時）が1982年に提唱したルックイースト政策。この政策により、クアラルンプールの近代化を象徴する建物ペトロナス・ツインタワーやクアラルンプール国際空港（KLIA）には日本の建築技術が採用されています。マレーシア初の国産車にも技術支援を遂行。また、マレーシア事業に投資している日系企業も多く、多くの日本人ビジネスマンがマレーシアと深く関わっています。近年では「東アジア地域包括的経済連携（RCEP）」に両国とも参加し、アジア経済圏の一員としてさらに結びつきを深めています。

ルックイースト政策を建設背景に日本と韓国が一棟ずつ建設したクアラルンプールのランドマーク《ペトロナス・ツインタワー》。





1. ボルネオにはオランウータンの保護施設がある。2. マングローブは津波や台風などの自然災害を緩和し、豊かな生態系を育む土壌を作っている。3. 先住少数民族の生活や文化体験ができる《マーメリ文化村》。先住民族の生活保護の推進プロジェクトのひとつ。4. 日本とマレーシアはエネルギー事業の共同プロジェクトを実施し、カーボンニュートラルの実現に向け連携がスタートしている。

マレーシアの現状と課題を理解し ありたい未来を考える

SDGsとハラル

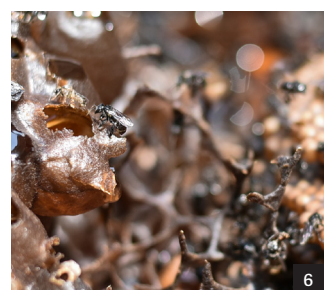
日本と異なる環境や文化をもつマレーシアは、日本とはまた違った様々な課題を抱えています。気候変動、地球温暖化、環境保全など、マレーシアを通して世界規模の課題と向き合います。森林資源の保護に向けた植樹の取り組み、持続可能なパーム油の生産への切り替えなど、すでに対策を始めているプロジェクトも多くあります。また、国民の6割程度がイスラム教徒のマレーシアは、おもに食事に関係するハラル（イスラムの教えで合法なもの）の考えがあります。日本ではあまりなじみのない宗教食について理解します。

脱炭素

気候危機を回避するために取り組むべき脱炭素（カーボンニュートラル）の実現。日本とマレーシアはエネルギー事業の共同プロジェクトを実施し、様々な取り組みを行っています。たとえば、東京都とクアラルンプールの都市間連携、JOGMECとマレーシア国営石油会社ペトロナスによる事業創出など、官民を問わず様々な連携がスタート。これらのプロジェクトを学ぶことで、脱炭素の実現に向けての世界の動きを学び、アジアにおけるエネルギー問題について考えます。

生態系の保護

熱帯気候に属するマレーシアは、雄大な自然のジャングルがいたるところにあり、希少な野生動物が多数生息しています。1億3000年前から続くジャングルといわれるタマンネガラには、250種に及ぶ鳥、300万種の昆虫が生息。ボルネオを生息地とするオランウータンやマレーグマなど豊かな生態系が育まれています。ところが1960年代より森林伐採が進み、熱帯雨林が急激に減少。自然災害も誘発し、生物の生態系がおびやかされています。熱帯雨林における生物多様性の保護と環境変動への対応が求められています。



5. 日本とは異なる生態系が学べる《マレーシア森林研究所（FRIM）》。6. 針をもたないミツバチ『スティングレスビーハニー』の巣。数が少ないため、採れる蜂蜜は希少価値が高い。産学連携により現地農家を支援し、自然環境保護に配慮した商品が開発された。



コミュニケーション力 英語力を高める

ホームステイ（カンポンビジット）

日本のホームステイのイメージとは違い、郊外の村（カンポン）を訪れ、そこで暮らす人々の日常や土地の文化風習に直接触れることができる異文化体験プログラムです。たとえば、シンガポールからバスで1.5時間程度の距離に位置するジョホール州の「アエヒタン」。ここは日本旅行が独占契約をしている村で、独自のプログラムを多数提供しています。なお、カンポンビジットのプログラムは、2012年に国連世界観光機関（UNWTO）より、地域の活性化に大きな効果をもたらした画期的なツーリズムとして、ユリシイズ賞を受賞しました。



1. ホームステイ先ではマレーシアの家庭料理が味わえる。2. マレーシア全土で親しまれている、伝統ゲーム『チョンカッ（Congkak）』。「Congkak」とは古典マレー語で「頭脳計算」という意味を持ち、知恵と戦略が必要とされる。3. ホームステイ「アエヒタン」からすぐ近くの高校。地元の高校生たちと英語で様々な文化交流を行う。4. 日本旅行村「アエヒタン」にてホームステイを体験。民族衣装体験などマレーシアの日常や文化に直接触れることができる。

同世代同士の学校交流

教育旅行で最も人気が高く、参加した生徒の満足度も高いのが、学校訪問です。マレーシアの学生は英語レベルが高く、こちらがカタコトの英語でも伝えたい意図を汲み取ってくれるので、自然にコミュニケーションがとれます。文化交流、チームビルディング、ゲームなど様々なアクティビティが用意されていて、リラックスした雰囲気での交流です。同世代なので共通の話題が多く、打ち解けるのも早いでしょう。マレーシア政府は学校交流の受入れに積極的で、試験期間以外ならば基本的にいつでも訪問可。1日や半日などプログラムは柔軟に対応できます。



事前・事後学習

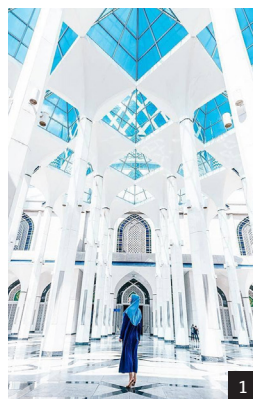
マレーシアで学べるテーマは多岐に渡っていて、なかでも**多文化共生**は、日本では決して味わえない体験です。互いに異なる価値観を持つ人々がどのように共存しているのか。その問いは、グローバル人材として国際社会で活躍するために必要な視座を高めてくれるでしょう。

また、マレーシアの歴史や**日本との関係**をひも解けば、外から見る日本に触れることができます。熱帯雨林や動植物の**生態系、環境保護**の重要性を学ぶ素材もたくさんあります。ここに挙げた3つのテーマを参考に、課題理解、現地での調査検証、帰国後のまとめを組み立ててみましょう。

マレーシアに学ぶ多文化共生

マレーシアがどのようにして多民族国家になったかを事前学習し、民族共生が体感できる場所を選定。現地では、学校交流で意見交換をしたり、宗教施設と地域コミュニティの関わりを調査するなど、日本とは異なるポイントを観察しましょう。

1. 《スルタン・サラフディン・アブドゥル・アジズ・シャーモスク（ブルーモスク）》イスラム寺院。 2. 《パツークイブ》ヒンドゥー寺院。 3. 《テンゴウキュウ（天后宮）》中華系寺院。



日本とマレーシアの関わり

ルックイースト政策に注目し、日本と共同で開発したマレーシア初の国産車メーカー「プロトン」について、どのような経緯で取り組みを行ったのかを調査してみましょう。現地では、工場見学をし、日本とマレーシアの産業連携を学びましょう。



地球規模の環境問題を考える

マレーシアのジャングルで育つ植物についての調査や、森林伐採問題、野生生物の数の減少について事前学習。現地では、森林研究所を訪問したり、自然保護活動ボランティアを体験。学んだことと実体験を重ね合わせて事後学習を深めましょう。



その他、様々なテーマで事前・事後学習を行えます

先住民族 / 伝統工芸 / 地理、歴史 / 南国フルーツ / 食文化 / 伝統建築 / ホームステイ(カンポンビジット)の国の取り組み、など。



コース例

自然と文化を学ぶ5日間

クアラルンプールを拠点に、現地でしかできない体験学習を多く盛り込んだコースです。マレーシアの3 大宗教であるイスラム教、仏教、ヒンドゥー教の各寺院を巡り、多宗教が隣り合わせにある社会を体験。学校交流や日系企業訪問にて様々な人々と会話をしたり、交流をすることで、現代に必要な国際感覚を養います。マレーシア森林研究所 FRIMでは、熱帯雨林の実態の把握、環境保護の取り組みなど、世界規模の課題を学びます。

行程の例

- Day 1 KLIA **1** → チェックイン
 Day 2 ビューター工場見学 **11** → 街歩き(ツインタワー見学) **5** → 企業訪問 **12**
 Day 3 FRIM **13** → バツ洞窟 **14** → ブルーモスク **15**
 Day 4 学校交流 **16** → プトラモスク **6** → KLIA **1**
 Day 5 日本着

※見学箇所の順序は入れ替える事が可能。

モデルコース

多様な学習素材がマレーシア各地に点在しているので、学びたいテーマに合わせて効率よく訪問できるよう、事前にしっかりコースを組んでおくことが大切です。

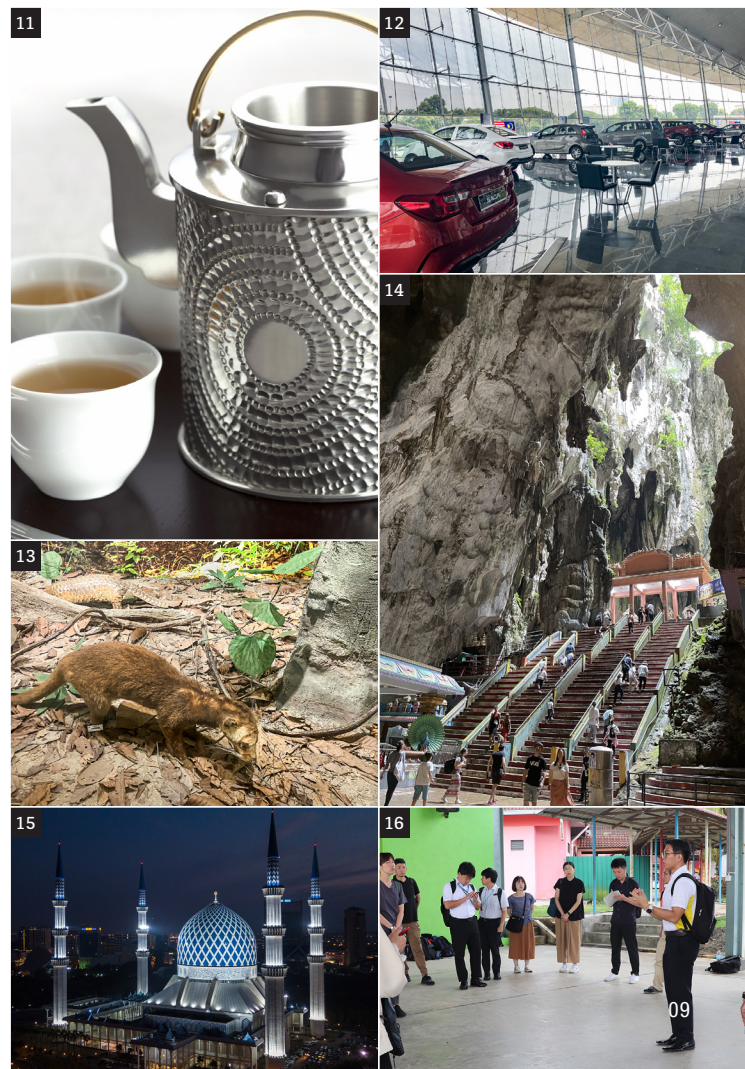
コース例

国境を超える5日間

マレーシアで歴史や多文化共生について学んだ後、シンガポールへの国境越えを体験します。国境を境にガラッと雰囲気が変わるの、島国の日本ではなかなか体験できないものです。クアラルンプールを始点にマレー半島を南下。マラッカで歴史を学び、ジョホールでカンポン(村)ビジット。その後、バスでシンガポールに入るの、効率よく体験ができます。なお、シンガポール IN / OUT のコースも企画可能なので、お問い合わせ下さい。

行程の例

- Day 1 KLIA **1** → チェックイン
 Day 2 国立博物館 **2** → ムルデカ広場 **3** → I♥KL **4** → ツインタワー **5**
 Day 3 プトラモスク **6** → マラッカ **7** → UK ファーム **8**
 Day 4 学校交流 **16** → カンポンビジット **9**
 Day 5 シンガポールへ国境越え **10** → 帰国





豊富な学習素材

マレーシアには、現代のニーズに合った学習素材が豊富にあります。言語、文化、宗教の異なる人々が共存するダイバーシティ(多様性)を身をもって体感できる異文化交流。世界有数の熱帯雨林から学ぶ

環境学習体験も可能です。さらに、英語が広く使われている国なので、現地でのコミュニケーションを通して、生徒が自身の英語力を試せるよい機会になります。

交流から異文化への理解力を育む 現地交流

学校交流

マレーシアは政府主導で学校交流に力を入れており、多数の学校で交流プログラムを提供しています。マレーシアの学生は英語レベルが高く、最近では訪問前から英語でメールのやりとりをし、現地で対面するというケースが増えています。同世代の子ども同士で会話することで国際感覚を伸ばし、それは将来への自信にもつながります。

ホームステイ／カンポnstay

マレー語で「村」を意味するカンポンに訪問するプログラムです。伝統的な生活風習や文化に直接触れることができます。訪問先は、マレーシア観光省の基準をクリアした家庭、村のみが対象なので、衛生面や安全面も安心です。ジョホール州の「アエヒタン」は日本旅行が契約をしている村で、様々な体験プログラムをご用意しています。

ブラザー&シスター(B&S)・プログラム

日本語を学ぶ現地の大学生が、生徒の自主行動をサポートするプログラムです。クアラルンプール等で実施されていて、日本の生徒6～8名に対し、現地の大学生が1名同行するのが一般的。たとえば、一緒に市内観光をしながらフードコートで食事をとったり、買い物をするなど、共に行動しながら、交流を深めることができます。

街歩き体験

治安のよいマレーシアは、生徒だけでの街歩きが可能です。自分たちで考えたスケジュールにそって、英語でコミュニケーションを取りながら、名所訪問や現地の料理に挑戦ができます。自主的な行動で得たものは、生徒にとって生涯の財産になるでしょう。B&S プログラムを利用すれば、現地大学生が同行するので、より安心です。

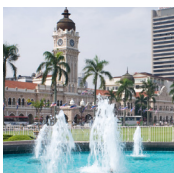
歴史を知り、国の理解を深める 歴史学習

国立博物館



マレーシアの歴史、政治、文化、工芸、そして日本との関わりが総合的に学べます。週に3日ほど、日本語ボランティアによる博物館ガイドツアーが実施。クアラルンプール中心地にあるKLセントラル駅から徒歩10分程度。

ムルデカ広場



ムルデカとはマレー語で独立のこと。1957年8月31日、マラヤ連邦の独立が宣言された歴史的な場所で、高さ100メートルの掲揚棟に国旗がはためいています。クアラルンプールのオールドタウン地区にあります。

世界文化遺産(マラッカ、ジョージタウン)



マラッカとペナンのジョージタウンは、2008年にマラッカ海峡の古都群として世界文化遺産に登録されました。地の利のよさから欧州列強に翻弄された歴史をもち、東洋と西洋の交差点として独特の文化が育まれています。

ペトロナス・ツインタワー



高さ452mを誇る超高層のツインビル。モダンなイスラム文様の建築デザインが秀逸で、国の発展を国内外に示す象徴的な存在です。日本と韓国の建築会社によって建造され、ビル内には日本のISETANが入っています。

海外で働く日本人から学ぶ 企業訪問

日系企業視察

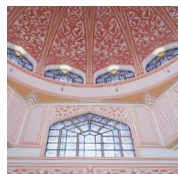
マレーシアには日本企業が1400社以上進出しています。グローバル人材の先輩である日本人ビジネスマンから実際の仕事内容や海外の生活体験を聞くことで、将来なりたい自分の姿を具体的にイメージすることができるでしょう。



多宗教・多文化を肌で感じる

文化体験

各地にあるモスク



イスラム教を国教とするマレーシアは、いたるところにモスクがあり、祈りの時間以外であれば、信者でなくても見学が可能です。繊細なアラビア文様やドーム屋根のフォルムなどデザイン性にも優れ、見ごたえがあります。

バツケーブ



クアラルンプール郊外にあるマレーシア最大規模のヒンドゥー寺院。272 段の階段を上ると、石灰岩からなる山塊の内部に寺院があり、聖者スブラマニアンが祀られています。イスラム教とはまったく異なる宗教体験ができます。

バティック



バティックとは、ロウで下絵を描く伝統的な染色技術です。色鮮やかに仕上げるのがマレーシアン・バティックの特徴。オリジナルの小物を制作し、日本に持ち帰ることができます。クアラルンプールやジョホール等で体験可能。

イスラム美術館



イスラム世界のアートや工芸品が、約3万㎡という広々とした館内に展示されています。著名なモスクの模型、入口の天井に描かれたイスラム装飾が見どころ。クアラルンプール中心地、KL セントラル駅から車で10分程度です。

マーメリ文化村



マレーシアの先住少数民族、Mah Meri（マーメリ）族の生活や文化に触れることができる場所です。マーメリ族に伝わる仮面踊りの観賞や模擬結婚式の体験などができます。クアラルンプールから車で約1時間程度です。

ピューター

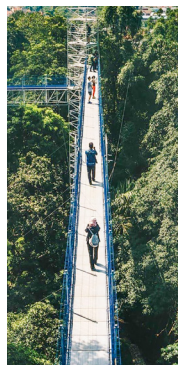


マレーシア土産として有名なピューター製品は、かつてマレーシアがスズの採掘地だったことに由来します。世界的に名高いブランド「ロイヤルセランゴール」はマレーシアの会社で、ピューター制作の見学や加工体験ができます。

自然を観察し、環境問題を考えよう

自然学習

キャノピーウォーク



熱帯雨林を間近に観察できるアクティビティ。樹と樹の間を空中でつなぐ吊り橋状の道で、およそ10階建てに相当する高さを歩くスリリングな体験。ペナンやボルネオなど全土に体験スポットがあり、クアラルンプールであれば、世界で最も古い森林公園のひとつであるマレーシア森林研究所FRIM（フリム）での体験が人気です。

マングローブ

マングローブは木の名前ではなく、淡水と海水が混ざり合う汽水域に育つ植物の総称。海の生物の住処であり、陸の生物の捕食場として、生態系に欠かせない自然です。マレーシアは約57万5,000ヘクタールのマングローブを有していますが、近年、土地開発により急激に面積が減っており、保護活動が進められています。

マレーシア森林研究所 FRIM

クアラルンプール郊外にあるFRIMは、熱帯雨林の分野において世界有数の研究機関です。総面積約600haの敷地内で、ジャングル・トレイルや全長250mのキャノピーウォークを体験できます。動植物の生態系だけでなく、森林エコロジーの研究にも取り組んでおり、幅広い視点で森林資源について学ぶことができます。

世界規模の課題を考え、視野を広げる

課題解決

植樹プログラム

環境保護や景観維持を目的とする植樹プログラム「Plant Tree Program (PAT)」は、おもにホームステイ先のプログラムで提供されています。植樹を通して、地元の人たちとの交流もできます。

UK ファーム

SDGs推進の牧場「UK ファーム」。山羊を中心とした畜産業から食品加工業までを行う循環型農場です。イスラムの教え「許されるもの」という意味の「ハラル」を順守した食肉加工を環境に配慮しながら行っています。

自然保護活動ボランティア

自然豊かなマレーシアには、教育向けの自然保護活動が多数。なかでも人気なのが、ボルネオでのオランウータンの保護活動。行動記録や施設の清掃を体験できます。クアラルンプール近郊にある国立動物園でも一部体験が可能です。

脱炭素の取り組み

日本はマレーシアと連携して「脱炭素」に取り組んでいます。東京に加えて、各地方都市との連携も進んでおり、アジア全体の低炭素化社会の構築に向けて、一体となって動いています。事前・事後学習に最適な学習素材です。

マレーシア基本情報

宗教

国教はイスラム教。信仰の自由が認められていて、他に仏教、ヒンドゥー教、キリスト教、道教、シーク教などが信仰されています。それぞれに宗教行事やしきたりがあり、とくにイスラム教の断食明けの「ハリラヤ」や中国の春節は国を挙げての賑やかな祭りです。

民族

国民の約58%がマレー系、約23%が中華系、約7%がインド系。残り12%は少数先住民族等の総数です。

気候

年間の平均気温は約27℃で、夏服で行動ができます。ただ、エアコンが効いている場所が多く、長袖や長ズボンは必須。乾季と雨季があり、マレー半島東部やボルネオ島は10～3月、西部は5～9月が雨の多い季節になります。

時差

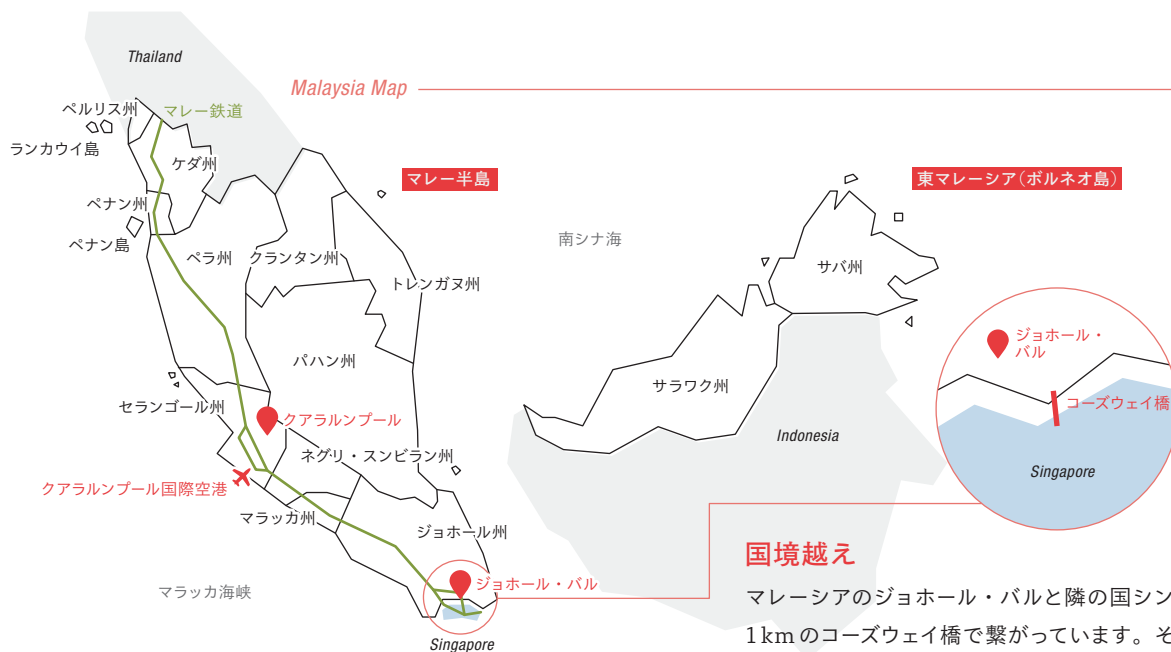
日本との時差はたったの－1時間で体の負担はほぼありません。日本が午前8時なら、マレーシアは午前7時になります。

通貨

通貨はリンギット（RM）で、1リンギット＝約31円（2023年）。なお、マレーシア国内でのUSドルや日本円の利用はできません。

ビザ・パスポート

日本国籍を有する方で観光や商用目的の場合、90日以内の滞在であれば、ビザは不要です。ただ、入国時にパスポートの有効期限の残期間が6ヶ月以上、帰路（または次の目的地）の航空券の所持が必要です。また、首都クアラルンプールが位置するマレー半島から、ボルネオ島サバ州、サラワク州に入る場合、再び入国審査があります。日本以外の国籍を有する方は、ビザが必要な場合もあるので、事前に確認を。到着時のビザ取得はできません。



国境越え

マレーシアのジョホール・バルと隣の国シンガポールは、わずか1kmのコーズウェイ橋で繋がっています。そのためバスや列車を使って、たった1時間程で国境越え体験ができます。ただし、入国審査に時間がかかることはあります。

Contact

株式会社日本旅行

本社所在地

〒103-8266 東京都中央区日本橋 1-19-1

日本橋ダイヤビルディング

TEL: 03-6895-7766（ソリューション事業本部 教育事業部）



学校・教育機関向け
ウェブサイト